

岩手医科大学歯学会第32回例会抄録

日時：平成3年6月29日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. 全身麻酔下における歯科処置内容についての考察

○島津 聡子, 野坂久美子, 守口 修
駿河由利子, 辺見 夏樹, 印南 洋伸
佐藤 輝子, 小野 玲子, 甘利 英一
久慈 昭慶*, 鹿内 理香*, 城 茂治*

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

岩手医科大学歯学部歯科麻酔学講座*

全身麻酔下での治療の必要条件は、限られた時間内で、より多くの歯数を正確に行い、かつそれらが永続的なものであるということが、考えられる。今回は、1990年4月より、岩手医科大学歯学部歯科麻酔科発足から約1年間に行われた、小児歯科における歯科治療の内容と、その予後について報告した。

対象は、外来での取扱いが困難であったり、通院不可能な遠距離者で、3歳から23歳までの男児10名、女児13名の計23名である。症例の内分けは、精神神経障害（てんかん・精神発達遅滞・自閉症など）16名、Down症候群2名、Stürge-weber症候群、染色体3p症候群、網膜色素変性症が各々1名、健常者（歯科治療恐怖症）が2名である。全身麻酔方法は、GOS, GOF, GOI のいずれかで行われ、その際の合併症は5名に認められた。すなわち、体温上昇、気管支痙攣、分泌物の増加、退院後肺炎等であった。しかし、肺炎を除いては、いずれも当日あるいは翌日には改善した。通院は小児の安全確保のために、2泊3日がほとんどであった。口腔内所見では、1人平均齶蝕歯数が10.6歯であり、とくに乳歯では第二乳臼歯に、永久歯では第一大臼歯に多くの齶蝕が認められた。処置内容は、修復が大半を占め、中でもレジン充填が多く、次いで乳歯用既製冠やインレー、鑄造冠であった。また、抜歯は修復に次いで多かった。処置時間は、1人当たり25分から4時間35分で、平均2時間29分であった。経過年数と修復物の状態は、6ヵ月未満と1年以上のものにトラブルの発生が認められ、186歯の修復歯中5歯に脱落と破折が認められた。そのほとん

どが乳歯におけるレジン充填であった。また、予後をより良好にするためには、一回の処置にとらわれず、齶蝕の状態に応じた処置回数も必要と考えられた。

演題2. 粉末飼料飼育ラットにおける下顎枝内部構造の検討

添野 一樹

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

不正咬合の増加に対する要因の一つとして、軟食化傾向による筋機能の低下と、それに伴った顎骨の成長発育との関連性が指摘されている。このことは、おもに実験動物の乾燥頭蓋骨あるいは頭部X線規格写真による形態的な変化として報告されている。本研究は、この点に関して特に顎骨の内部構造について検討を行った。

実験にはWistar系雄性ラットを用い、粉末飼料および、固形飼料で5週齢から9週齢までの成長期に相当する期間飼育をした。屠殺後、下顎孔を基準とした下顎枝前頭断面の非脱灰研磨切片を作製し、蛍光顕微鏡下で、下顎枝断面像を上部、中央部、および下部に分けて観察した。また、骨の構造については、それを構成する要素として、石灰化骨、類骨、低石灰化骨および、骨髓空隙に分類し、それぞれを画像解析装置（カールツァイス製IBAS-2000）によって面積を求め、全断面積に対する占有面積比を中心に検討した。

その結果、石灰化骨の面積比は、粉末食群では固形食群より下回る傾向が認められた。9週齢における上部、中央部、下部の石灰化骨は粉末食群が32%、57%、52%で、固形食群は39%、58%、42%であり、石灰化骨の形成量に影響があることが示唆された。類骨・低石灰化骨は、石灰化骨とは逆に、粉末食群が固形食群を上回っていた。9週齢では粉末食群は36%、12%、18%で、固形食群は21%、6%、17%であった。しかし類骨の形成量は光顕下において、固形食群に優勢に認められた。骨髓空隙の面積比は、両食群共に変動は小さかったが、固形食群の9週齢の構成比41%、